

障害のある方の社会参加を目指す街作りの提案 「ミニリンピックを開催しよう」



序文

2020東京パラリンピックでは世界各国からの選手が、五体のどこかに不都合がありながら、すごい活躍を見せてくれました。

パラリンピックでは障害者のゲームを応援する私たちと、それに応えて一生懸命頑張っている障害者の方々が見事に一体化していました。

障害者が頑張れる場をつくり、みんなで応援する、そんなパラリンピックの様な仕組みが街にあれば、私たちの街はもっともっと活性化するのでは無いかと思い本提案をしました。



障害を持つ人の実態

内閣府による「障害者の状況」によると、

- 身体障害に区分される方 436万人（34人/1000人）
- 知的障害に区分される方 108万人（9人/1000人）
- 精神障害に区分される方 419万人（33人/1000人）

と日本人の7.6%が障害を持っていると区分されていました。

しかも、障害を持った人は毎年増えているのです。・・・次表参照

そんなに多くの方が居たのか？と私は驚きました。

街を歩いていて、そんなに多くの障害を持つ人は見かけません。

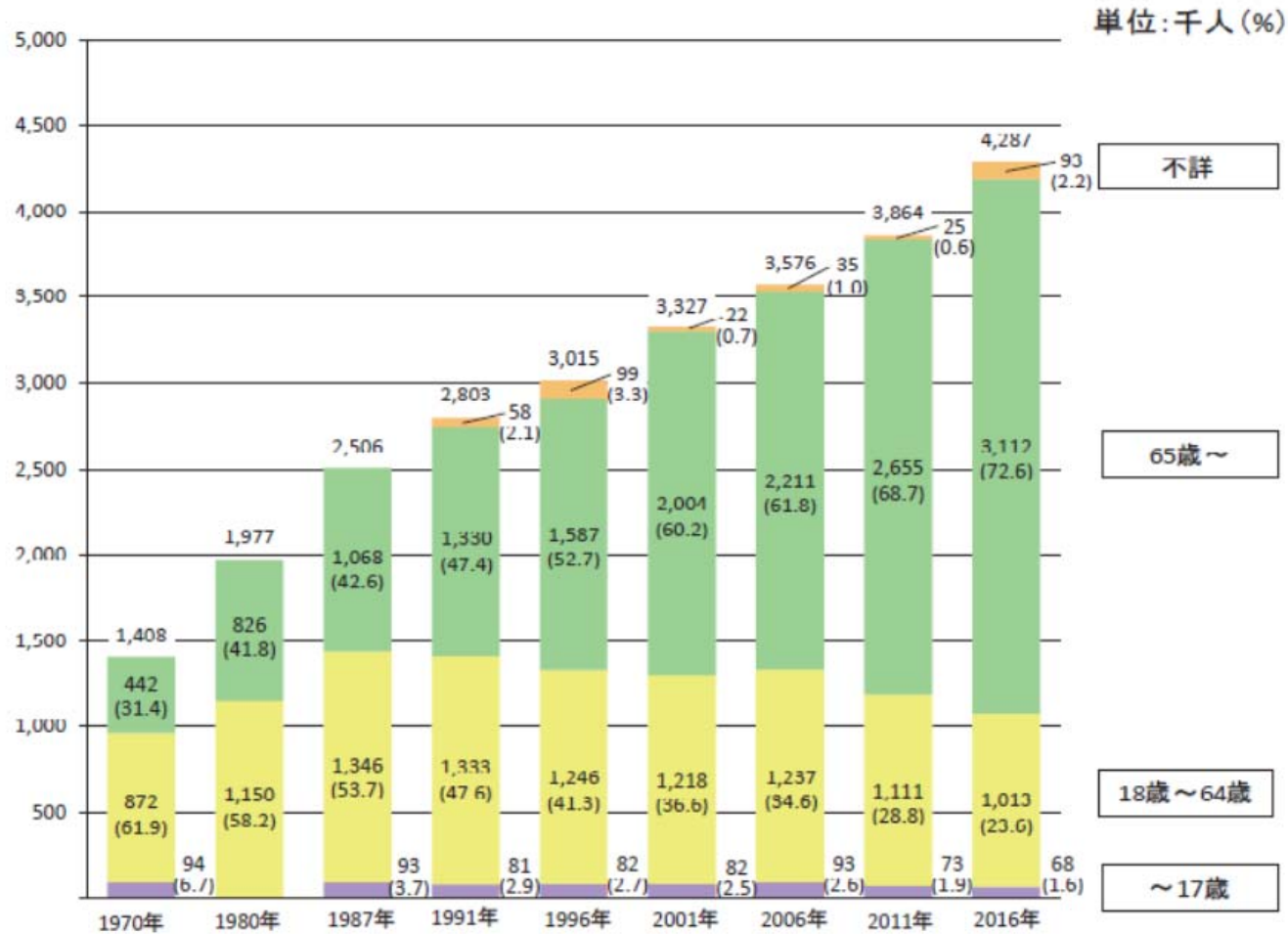
きっと障害ゆえに外を出歩かないのでしょう。

ちょっと、社会との断絶を感じます、、、

そして、私は、若い人の知的障害が増えているのが気になります。

私は、増加する障害者と地域がもっともっと共存できる明日を望みます。

■ 図表2 年齢階層別障害者数の推移（身体障害児・者（在宅））

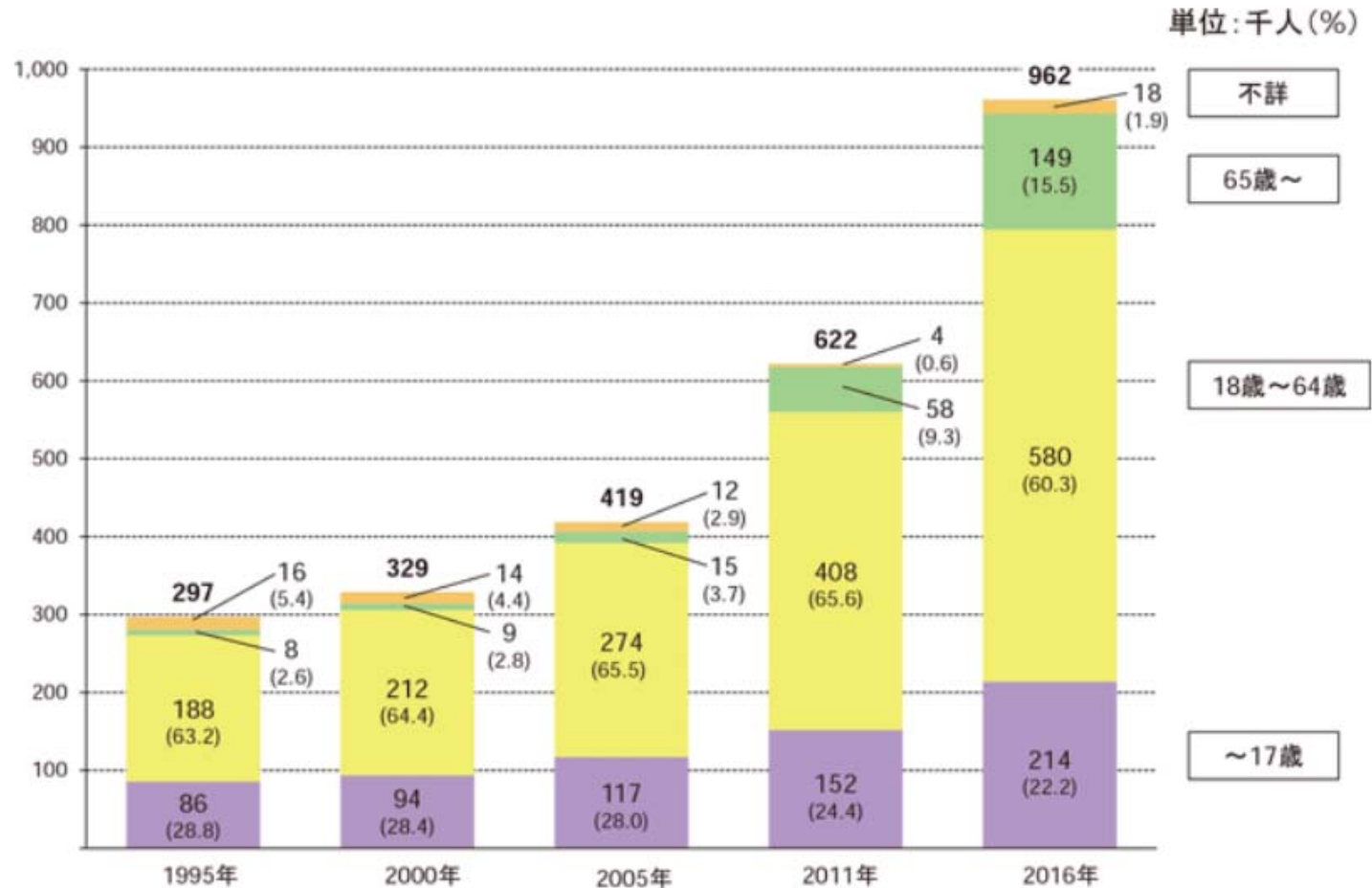


注1：1980年は身体障害児（0～17歳）に係る調査を行っていない。

注2：四捨五入で人数を出しているため、合計が一致しない場合がある。

資料：厚生労働省「身体障害児・者実態調査」（～2006年）、厚生労働省「生活のしづらさなどに関する調査」（2011・2016年）

■ 図表3 年齢階層別障害者数の推移（知的障害児・者（在宅））



注：四捨五入で人数を出しているため、合計が一致しない場合がある。

資料：厚生労働省「知的障害児（者）基礎調査」（～2005年）、厚生労働省「生活のしづらさなどに関する調査」（2011・2016年）

障害者への支援は？

障害を持つ方に対して、国から障害福祉サービスがあります。それは介護サービスや生活の自立や就業支援をするサービスです。

例えば放課後デイサービスと言うのがあります。これは、障害を持つ子供に対して、生活能力向上と地域社会への参加を促すこと、そして保護者のケアを目的として、認定された民間の事業所で障害児童の授業保育をします。障害児の通っている学校が終わった後、放課後のサービスです。

他には就労支援サービスというのがあります。それは、障害をもつ18歳以上の方を対象に、社会の中で働くための技能や心構えを訓練して実際の会社で働いたり、技能の習得するところです。

障害を持つ方に対して、国はそれなりの手当をしています。

でも、それは厚生労働省に「認定された民間の事業所」だけが「障害を持った方」を支援している感じです。障害者にとって手厚いサービスではありますが、障害者が社会に溶け込めるような仕組みになっていないように見えます。

我々自身が、社会の方から障害者に手を差し伸べて、障害者が社会参加できるような方法も考えたいと思います。

障害者と共生する社会は？

障害を持つ方は社会の一員です。孤立することはあってはならないと思います。障害を持った方も社会と交流をもち、人生を最大限楽しく生きることが出来る街でありたいと思います。

私たち、街の住民が障害者を応援し、障害者と一緒になって行動する仕組みを作ったらどうかと考えました。

パラリンピックが大いに参考になります。パラリンピックは

1. 障害者の晴れの日である
2. 障害者の頑張りをみんなが見て、応援する

これをコンセプトに街の仕組みを考えました。

町内会や市町村レベルでミニリンピックを提案

ミニリンピックとは？

目的

- 何らかのハンディキャップを持つ人（一般に障害者）が地域のコミュニティと楽しみを共有できる場を設定する
- ハンディキャップを持つ人が主役で、地域コミュニティはその応援団・観客となるような場を構築して、ハンディキャップを持つ人の晴れの場を設定する

1. 参加者

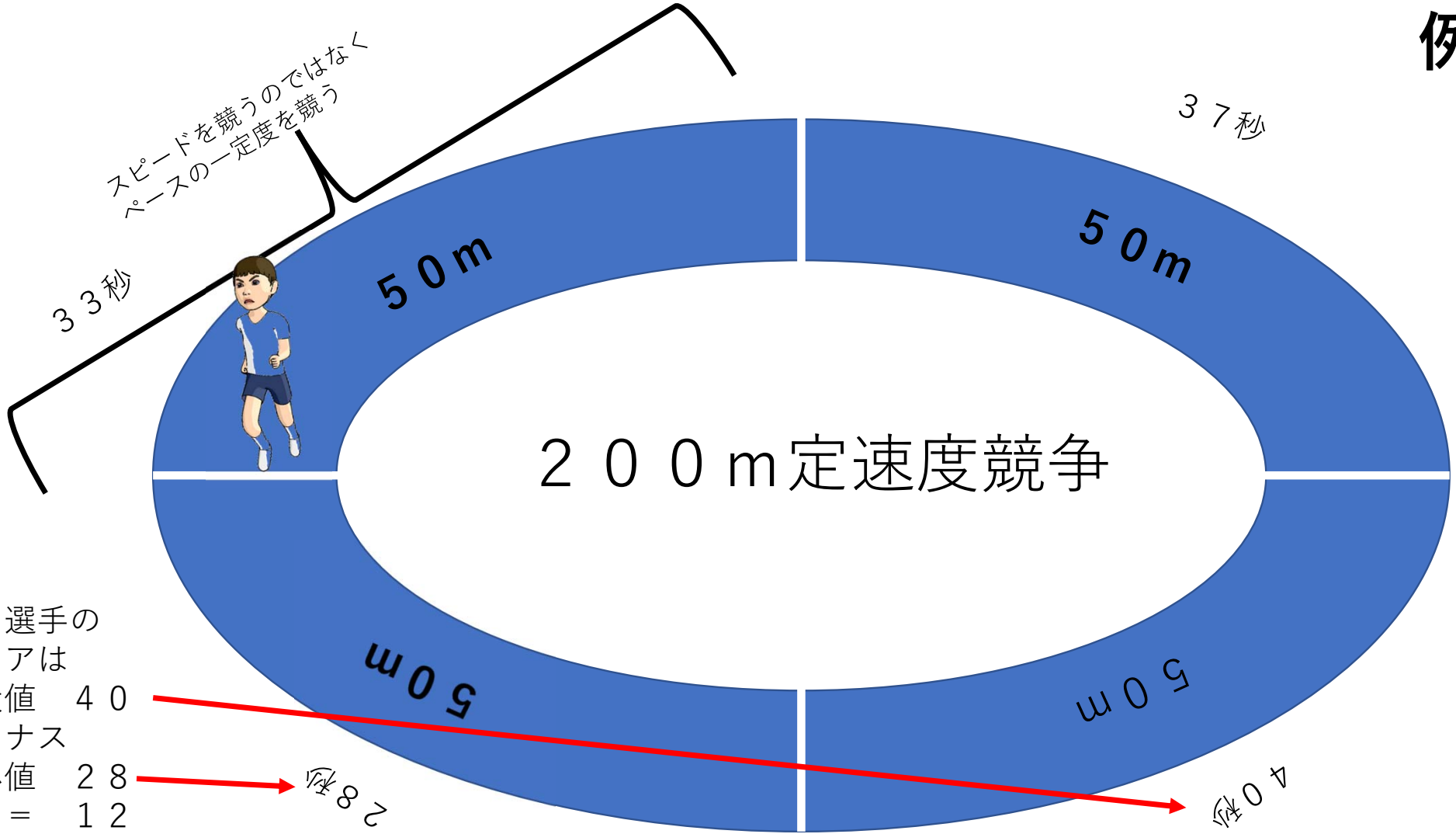
- 知的障害や身体障害を持つ人：放課後デイサービス利用者、就労支援サービス利用者等
- そのサポーター：上記サービスを提供する事業者の職員等
- 地域コミュニティ：町内会や子ども会（鹿児島県ではあいご会）、一般ボランティア

2. 実施競技の案

障害があっても健康的で楽しくできる競技を工夫する必要があります。運動技能や知的技能が必要なが、誰にも勝つチャンスがあるような競技です。

- 200m定速度競争：50m毎のタイムを等速度で歩くことを競う
- ボッチャすごろく：パラリンピックの競技のボッチャで1から6の数字が出るようにしてすごろくを競う、個人競技と健常者と組んだ団体競技
- 肺活量競技：肺活量測定器のような器具で水の入ったタンクに10リットルに近づくように吹き込む
- 心拍数競技：静止時の心拍数を踏み台昇降や腹筋などの運動で10%up、20%upに近づくようにコントロールするゲーム
- 瞬間記憶競争：3～5枚の絵を1秒同時に見せて、その絵に描かれている動物、野菜・果物、花などを後で言い当てる。全部正解で10m進み、不正解数だけ10m後退する。10回のゲームで最も先に行った選手勝利

例



数値が少ないほど上位になる。合計タイムの138秒は参考タイムとして扱う。

3. どこでやるのか？・・・実行するための戦略

いきなりパラリンピックのような競技会を主催するのは無謀である。
そこで私は実現できる方法を考えた。

それは、

◆町内会主催の運動会に（該当地区の就労継続支援サービス利用者の参加を前提にして）
あるいは

◆小学校や中学校の運動会（該当小中学校の生徒が放課後デイサービスを利用しているこ
とを前提として）

ミニリンピック競技を組み込んでもらう

具体的には運動会の昼休憩時間の1時間を使わせてもらう。

1. 選手は上記サービスを利用している障害を持つ人（10から20名程度）とボランティアの生徒や地元の有志（10から20名程度）とする
2. また進行や誘導を担うボランティア10名程度（ミニリンピック提案者）
3. 種目は2種目程度で、会場からの応援を促すため司会から面白おかしく協議の案内や進行状態と結果をアナウンスする。
4. 表彰式は校長やPTA会長に出てもらい権威をつける
こんな提案を学校にして受けてもらえないだろうか。

ミニリンピック開催に期待できること、

・・・障害者の社会環境をどう改善できるだろうか？

1. 障害者本人とその家族

- 身体にハンディを持つ人、知的障害や精神障害を持つ人が地域社会のなかで健常者の中に混じって一緒に楽しむ場となる
- 増加傾向にある知的障害者にとっては社会と接して様々な体験をすることが知的障害の是正の大きな手段となる

2. 障害者福祉サービス事業者

- 障害者福祉サービス事業には手厚い政府助成金がでることから、障害者への積極的な社会参加への支援サービスというより、事業所で“預かり”サービス、障害者の時間つぶしを目的とするような取り組みが主なサービスとなっているとこともあると聞く。
- 仮にそのような福祉事業者がいるとすれば、本来の趣旨に導くべく、見本を示す機会となる

3. 地域（学校や町内会）

- 最近では外国人、ジェンダーなど住む人も多様化がどんどん進みつつある、そんな中で、人口の7.6%を占める障害者を取り組んだ活動は避けられないのではないだろうか。その多様化への一歩となる